二次元ぷち文庫

倉田シンジ

表紙イラスト：つづきますみ

# 淫虐の囮捜査官

GUILTY TRAIN SIDE STORY

ギルティートレイン外伝

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『ギルティートレイン外伝　淫虐の囮捜査官』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ
『ギルティートレイン　被虐の囮捜査官』
『ギルティートレイン２ 魔悦の教室』
『ギルティートレイン３ ロストエリシウム』
（キルタイムコミュニケーション刊）
とともにお読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

淫虐の囮捜査官
GUILTY TRAIN SIDE STORY
ギルティートレイン外伝
倉田シンジ
表紙／つづきますみ
二次元ぷち文庫

# 登場人物紹介

Characters

あいざわ なつき
**相沢奈津樹**
数々の難解事件を解決してきた、敏腕女捜査官。

照明がほんのり落ちる店内に、様々な人間が集まっている。
耳を澄ませれば、聞こえてくるのは男女の密やかな話し声。時折上がる笑い声には、人間の傲慢や欲望が詰まっているようにさえ感じられた。
ここは、この界隈では高級な部類に入るキャバクラだ。社会の中ではそれなりの肩書きを持つ客たちが、何十万、時には何百万という金を一夜にして浪費する場。
「……で？　ナツキちゃんはどうする？」
突然の呼びかけに、名を呼ばれた女性がはっとして顔を上げる。
「あ、はい、私も同じものでおねがいします」
自分はいまどんな顔をしていただろうか？
ナツキは慌てて人当たりのいい、あるいは軽薄ともとれる笑顔を繕って客に微笑んだ。
「ナツキちゃん、一ヶ月も経つのにまだ緊張してるの？　可愛いなぁ～」
タバコをくわえる客の男に控えめな愛想笑いを振りまいて、ナツキは火のつけたライターを差し出した。その陰で、気づかれないようにふうっと溜め息を漏らす。
この仕事、いつまで経っても慣れない。
（だめね、しっかりしないと。もう少しで手がかりが掴めるんだから……）
心の中で呟き、彼女はすぐに運ばれてきたウィスキーと空のグラスを手に取った。
ナツキは今年で二十五歳。店では二十歳ということになっていたが、若々しい外見から

はあながち嘘にも見えなかった。無理にさばを読まなくても充分な魅力に溢れている。
ともすれば鋭さを感じさせる瞳に二重のまぶた。薄い口紅に飾られた唇は厚くもなく薄くもなく、すらりと通った鼻筋とあわせてスマートな印象を見る者に与える。
「ナツキちゃんてさ、美人だよねー。この店ってモデルとか芸能界の子もこっそりバイトしてるって話だけど、ナツキちゃんはそういうんじゃないよね？」
とある有名商事に勤めるエリートだという客は、彼女を見つめてストレートな感想を口にした。無造作に伸ばした手で、揃えられた彼女の前髪をすっと掬い上げる。
馴れ馴れしい仕草に、ナツキの肩がぴくりと震えた。
「……ありがとうございます」
だが彼女は、わずかに微笑んで礼を言っただけ。
綺麗に整えられた黒髪はショートとミディアムの中間で、首筋までストレートに流していた。化粧は薄めで上品、逆に言えば、無理に飾り立てる必要もないほど素材がいい。
店の常連からの評判も上々、経営スタッフからも成長株だと見られている。
しかし、そんなナツキ――相沢奈津樹は、潜入捜査官だった。今日はこの店にホステスとして潜入してから、ちょうど一ヶ月目にあたる。
客からの褒め言葉を受け流しつつ、酒の注がれたグラスを差し出す。
「どうぞ。乾杯しましょう？」

「おっ、いいね。じゃあ……」
客に上品な笑顔を向けながらグラスを合わせて乾杯。ほんの少しだけ喉を潤す。
(あと少しで証拠を手に入れられる……機会さえあれば……)
彼女が探っていたのはこの店の経営者だった。もっとも、登記上の経営者ではない。
この繁華街には、売春から麻薬、果ては人身売買めいたことまで手がけるという地下組織が巣くっていた。警察の捜査にも尻尾を出さず、巧妙に活動し続ける犯罪組織だ。
その組織が経営に直接関わっている店がここだ。
インテリ風の店長は組織の会計係で、ここも見た目こそ高級なだけのクラブだが、裏では資産家向けの高級麻薬が売り買いされる、いかがわしい取引の舞台になっているという。
組織に長年苦汁を舐めさせられてきた警察は、その情報を得てついに潜入捜査を決定した。それが二ヶ月前で、奈津樹が捜査員に選ばれたのが一ヶ月前。
奈津樹はホステスになりすまして店に侵入し、数日前、店長室の奥に地下組織の尻尾を掴む証拠があるらしいことを探り当てていた。
だが、その部屋へは無用の立ち入りが禁止されている。まして新人の奈津樹などは近づくことすらできない。絶対に失敗するわけにはいかない捜査だ。焦るわけにはいかない。
「次の給料が出たら、ナツキちゃんのためにピンドン入れちゃうからね～」
客の男が馴れ馴れしく手を伸ばしてくる。内心むっとしながらも彼女は微笑んだ。

「ホントですか？　嬉しいな。……ん……っ……」
肩に回された手が彼女の白い首筋を撫でている。男の目尻はいやらしく緩んで、視線はきゅっと盛り上がった豊乳に注がれていた。
（まったく……。だらしない男……）
言葉遣いや仕事の内容もそうだが、この下品なセクハラも慣れられない。
彼女が着るドレスはせいぜい膝までしかなく、どちらかといえばベアトップのワンピースに近い。肩から胸元まで晒した肌は、そのなめらかさで照明に白く浮かんでいた。
ひたすら華美さを求めたような他の女性に比べると、地味にも思える衣装だ。
なのに、目を引く。彼女がひときわ魅力を持った女性だからだった。
もっとも、その地味めな衣装でさえ奈津樹にとっては、早婚だった友人の結婚式でしか着たことがないような派手に思えるモノだったが。
首を回った手が、豊かな乳房の膨らみに触れる。
「っ、もう……やめなさい！」
ぼうっとしていたせいで、思わず口を衝いてしまう言葉。
ぽかんとした客を見て、彼女は慌てて口を押さえる。
（我慢、我慢しなきゃ……）
奈津樹はどちらかといえば気が強く、実行力もあって男勝りなところがある。それだけ

に、こういった女性を演じるのはストレスのかかる状況だった。
「ん。こほん……。だめですよ……？」
にこやかに微笑んで、胸元に伸ばされようとしていた手を優しく払いのける。
「いや～、ナツキちゃんにはかなわないな～」
男のだらしない顔を見てほっとした奈津樹は、もう一度こっそり溜め息をついた。
本当ならすぐにでも証拠を挙げたい。しかし奈津樹は、店の信用を得て証拠を確実にするまではと、ここ数日じりじりする思いで自重を余儀なくされていた。

その客に奈津樹が呼ばれたのは、営業も終わりかけの時間だった。
「お得意様だ。失礼のないようにな」
自分を呼びつけた店長がそう言っていたのを思い出す。
（なるほど……そういうわけね……）
こんな時間から指名がかかることをいぶかしんだ奈津樹だったが、滅多に使われることのないＶＩＰルームに向かってみてようやく納得がいった。
「ナツキです。よろしくお願いします」
愛想を振りまいた相手は、四十代前半に見える。
いかにも金持ちそうな身なりをしていた。質感が違うスーツに有名ブランドの時計。両

隣に奈津樹の先輩にあたるホステスを一人ずつはべらせて、テーブルには一本何百万のボトルが何本も並んでいる。
「この子まだ新人だけど、店長にもすっごい期待されてるんですよー」
シャギーの茶髪をいじりながら、先輩ホステスがそう言って客にしなだれかかった。
「そうそう。一ヶ月で新藤さんの相手に呼ばれるくらいなんだから」
客を挟んで反対側にいるウェーブヘアもそう言って頷いている。
「ほぉ……そうか。なるほど……」
先輩ホステスに新藤と呼ばれた客が、静かにグラスを傾けながら奈津樹を見上げてくる。
その、相手を値踏みするような鋭い視線を受けて、奈津樹は確信した。
（この客、裏組織と関係のある人間ね……）
つまり、組織の会計係であるこの店の店長よりも立場が上の人物。
となれば話は別だ。気の進まないホステス役にも気合いが入る。
「ナツキです。今後ともよろしくお願いしますね」
言いながら、できる限りの微笑を作って席に座る奈津樹。マニュアル通りに、空になった客のグラスに新たな酒を注ぎ入れようとする――だがその腕を客が掴み、
「気に入った。今日はきみに相手をしてもらうかな」
奈津樹を引き寄せると、静かにそう言った。

「えー。新藤さぁん、えこひいき？　寂しいナー」
両脇のホステスがブーイングしながらスペースを空けると、奈津樹は客のすぐ横に座らされてしまった。身体が密着するほどの距離だ。
「あ、あの……ちょっと窮屈じゃないですか？」
もじもじする奈津樹はそれとなく離れようとするが、がっちりと肩に腕を回されて逃れられない。
しかも男はその手を背を撫でるようにするりと滑らせると、今度は奈津樹の臀部へと伸ばしてきた。ドレスと下着の上から、引き締まった尻の稜線をなぞるように五指が這う。
「ん……っ」
少し眉を寄せて身じろぎする奈津樹。それとなく客へ向けて抗議の視線を向ける。
「……」
しかし男は視線を受けても無言のまま。それどころか、嫌がる彼女を楽しむように指の動きを激しくさせてくる。柔らかさを筋肉が適度に引き締めた尻肉が、わしわしと揉み込まれる。中指が、彼女の尻房の谷間へ潜り込むように割り入ってきた。
ぞくり、と背筋が粟立った。
（っ……！　この男……！　馴れ馴れしい……！）
さすがにカチンときた。これほどのあからさまなセクハラには店も黙っていないはずだ。

（……やればいいんでしょう……）

彼女は無心を心に言い聞かせながらブラジャーに手を掛ける。きゅっと食い込むように柔肉を支えていた布地が、縒れるようにして押しのけられた。

ぷるっと小さく弾んだ乳房は、弾力と張りに満ち満ちている。白く透けるような肌なのに、その量感はいやらしさを想起させるほどに膨らみを持っていた。首筋から鎖骨を通って肉丘の頂点まで盛り上がる乳房は、充分な張りのおかげで垂れることもなくつんと吊り下げられている。大きさのわりには希有な、緩やかなお碗型をしていた。

（……見られて……る……）

ちくちく突き刺さるような視線を感じる。どくん、どくん……心臓も早鐘を打っている。さっきまでは適温だったはずの室内が、にわかに熱帯雨林のような熱さを持ち始めていた。さらさらだった肌をしっとりさせる、芳しい汗が滲み出る。

「……」

無言のまま、今度はナマ肌のそれをペニスへ近づける。

ぺたり……。さっきとはわずかに違う感触。乳房の滑らかな肌が、自ら吸いつくようにして剛直に貼りつく。

「おお、いい感触だ……。やっぱパイズリはこうでないとな」

男の声を聞きながら、奈津樹は彼の指示のままに、そっと唇を開いた。

ふっきシーン試しよみ
ここから!

たらりと垂れ落ちる透明な唾液が、亀頭の先端に落ちてつうっと雫を作る。それはキラキラと輝きながら、乳房とペニスの間に染み渡っていった。

奈津樹は自分の乳房をきゅっと両脇から押さえ、間に挟んだ剛直に押しつける。

にゅる……ちぷっ……。

「んっ……！」

思わず声を漏らしてしまった。汗と唾液に濡れて吸着感を増した柔肉が、肌と肌の触れ合いを淫肉とペニスとの愛撫行為に変えている。

手を動かす。と、肉棒を包んだ乳肉はまとわりつくようにしながらペニスと擦れ合った。男の受ける感触はもちろん、奈津樹の感じるものもさっきとは違う。

（な……なに、これ……）

乳房に口で吸いつかれるような、しっとりした愛撫だった。硬いペニスは柔らかい乳房をへこませ、擦り、揉むような感触すらある。唾液と汗で密着感が増しているせいだ。

「ふ……んっ、あ……」

ぞくりと背筋に伝うのは背徳感。人前でいやらしく唾液を垂らし、自分から乳房を押しつけ、さらにはぴったりと密着した熱塊に胸を嬲られている――。ハッとした。

（しっかりして……こんなことぐらいで動揺してどうするの？）

すぐに自分を叱りつけ、奈津樹は乳房奉仕を再開した。両側からペニスを挟んでぎゅっ

と圧迫した。イニシアチブは自分にある……それを再確認するように。
すると、男は快楽を求めて自分で腰を揺らし始めてしまう。今度はその刺激が彼女を苛んだ。
「うっ……ん……ふ……」
スキンヘッドが少し腰を揺らすだけで、ペニスがにゅるっと乳肉を割って入り込んでくる。荒波に揉まれるようにしていた乳首が巻き込まれ、くにっと先端を折られる。
くすぐったいような、痒いような……放っておけない感覚が、乳先をむずむずさせる。
(だ、め……。気にしちゃ、だめ……)
一度意識した乳首の感触は、無視できないものとなる。
白い乳房の中でほんのりと赤らんだ乳暈。その先端は、綺麗な桃色を充血させつつあった。むずむず……チリチリ……くすぐったさがじわじわと心地よい波動を生み、乳肉の中まで染み入ってくる。突発的に漏れてしまう吐息を、どうしても抑えることができない。
「んっ……！　あ……ぅ」
ひときわ大きい吐息とともに、背筋がひくんっと伸びてしまう。
自分の反応を恥じて、いっそう心臓は速くなる。汗が滴になり、つうっと肌を流れていく。さっきまでは反抗的な光を秘めていた瞳に、女の弱さが影を落とし始めていた。
「やっぱりいやらしい身体してるだけあって、素質がありそうだなぁ？」

「そんなことは……ありません……」
自分を励まそうと敢えて反抗してみせた言葉も、どこか力が感じられない。
見上げた奈津樹と、見下ろす男の視線が交差する。
「そうかぁ？　さっきから見上げてくるその目を見てると、『もっと乳首いじってぇ』って言ってるみたいに思えるけどなあ」
下品にゲラゲラ笑う男に指摘され、とっさに目を伏せる奈津樹。
（……っ、これじゃ自分で認めてるみたいじゃない……！）
すぐに後悔するが、再び目を上げる勇気はなかった。
その眼前に、ペニスがにゅっと突き出てくる。ぴったりと閉じられた乳房の谷間、それをへこませて突き出る亀頭は、ぬらぬらした先走りを垂らしてわずかに男の匂いを放っていた。嫌悪感を感じさせながらも、切なく胸を締めつける妙な匂い。
「じゃあ、しっかり俺らの相手を務めてもらわないとな」
俯く奈津樹の頭をぺたぺたと叩くものがある。今言葉を発した男のペニスだ。
「う……」
身を焼くような屈辱を感じても、それを払い除けられない。その男が要求する行為は、もはや聞かずとも察しがついた。
片手を乳房から離し、代わりにそのペニスを握る。いつの間にか唾液と汗と先走りでヌ

ルヌルになっていた手の平は、剛直を握って上下し始める。
「おい、こっちも忘れるなよ。手が使えないなら口も使え」
次々に振ってくる命令に、彼女は従順に従う以外にない。乳房の圧迫から解放された目の前のペニスに、ちろりと出した舌先で触れる。
苦みと塩気を含んだ生臭い味が口に伝わってきた。
「ん……ふぅ……む……」
「おお、舌の使い方は上手いじゃないか。新藤さんの言った通りだな」
言って、再びの哄笑。そのたびに奈津樹の胸は屈辱に痛んだ。
無心に舌を伸ばし、鈴口を押さえた。そこからカリに至るまでをちろりちろりとこそぐように舐める。片手はペニスを、もう一方は相変わらず乳房でもって肉茎を擦る。
(ゲスな……男たち……！　絶対に負けない……これくらいで)
従順である代わりに、心の中では必死に抗っている。こんな行為をさせる男たちに、必ず報復すると心に何度も刻み込む。そうしていなければ、この異常な光景を意識してどうにかなってしまいそうだった。
その時。
んっ、とスキンヘッドが呻いた。ペニスがわずかに脈動し、ちょうど鈴口付近に当てられていた舌がそれを感じてひくんと引っ込む。

「んあ……っ！」
奈津樹は「それ」を感じて無意識に顔を引こうとした。だが、間に合わない。
びゅるっ！　びゅびゅびゅびゅっ！
逃げる端正な顔を追いかけるように、勢いのいい白濁が飛び出してくる。
「く……ぅ……」
髪や額に、頬に、あるいは首筋に。どろりとしたものが噴きかかってきた。ぺたぺたと貼りついては、嫌な熱を感じさせながら垂れ落ちていく。
（この匂い……。嫌な、匂い……）
どこか呆然としてしまっている奈津樹に、次々と降りかかる粘液。美貌を汚していく、淫らな白い汁と匂い……。
しかしそれは、目の前の男を満足させたという証でもある。嫌々ながらもひとつの仕事をこなしたのだということが、奈津樹には嬉しかった。
「汚してしまったなあ。高そうな衣装を……」
満足げな男は、そう言って捜査官を見下ろしている。自分をモノのように見下すその態度ですら奈津樹は気にならなかった。そのひとことがあるまでは。
「脱いでもらおうか」
「……え？」

らんでいる。せがむように伸ばされた手はかすかに震えて嗜虐感を煽り、開かれた股間ではヴァギナが充血して涎を垂らしていた。

「そこまで言われたらしょうがない」

「よし、思う存分楽しませてやる」

そこから先は、あっという間だった。捜査官の周囲に男が群がり、腕が伸びてくる。

「うく……ううっ、はぁあ……！」

むんずと掴まれた乳房がひしゃげた。乱暴な手の平に握られた柔肉は、指の隙間からむにゅっと肉をはみ出させて歓喜の感覚を弾けさせる。

（ああっ、いや、胸が、疼くっ……抑えられない……っ）

淫らな声など上げない――さっきまでの考えの甘さを噛み締めて、彼女は嬌声を上げてしまう。この快楽に逆らえると考えるなど、愚かだった。

「んんっ、ふ……ひゃ……あああっ！」

身悶えして背を反らした奈津樹は、まるで乳房を突き出して自ら愛撫をせがんでいるように見える。仰向けの身体の上、緩やかに山を作っている媚乳の肉が柔らかさを誇るようにぷるると震えた。甘酸っぱい発情臭がふんわりと漂う。

「いやらしく乳首を立たせやがって！」

山の頂点につんと突き立った突起に、男の口が吸いついた。歯と歯で挟んで弾力を楽し

えっちシーン試し読み ここからスタート！

み、引っ張り上げながらかりっと噛みつく。
電流が走った。下腹に入れていた力が、ふわっとした感覚に拡散される。肛門がひくつき、チューブとの間にわずかな隙間を空けていた。
ぴゅるっ！
「いやぁぁぁ！　だめぇ！」
小水のように勢いよく、ひとすじの液体が飛び出てくる。捜査官は子供のように首を振ってイヤイヤをした。なのに男たちは気にせず、股間に顔を近づけてくる。
「いや、あ……ふぁっ！　だめぇ！　きたな、ひっ！」
膣口に舌が潜り込んだ。穴を広げるようにくにくに伸ばしながら回転。膣口の柔らかな粘膜組織が、舌のざらついた粘膜に擦られてえもいわれぬ快美感を沸き上がらせる。
「ひあっ！　うぅ！　じ、じらすのは……ううっ！　やめ……ふぁあ！」
迫り上がった腰がゆらゆら左右に動き、舌から逃れようとする。が、内腿に当てられた手がそれを押さえつけ、彼女に大開脚を強いてきた。
大きく広がったM字の股間に、ぴちゃぴちゃいやらしい音が響く。愛液が舐め伸ばされ、クリトリスを淫らに彩り、小さな性感の核をぴくりと跳ねさせる。
「はぁぁうううっ！　吸わないで……！」
乳首と同じように、その敏感部に口が吸いついてきた。口の中、ぷるぷると舌先に弾か

れるクリトリスの痼り。身体を動かせば苦しくなるだけだと分かっているのに、腰を振らずにはいられない。

「ひぁっ！　出る、いやぁ……、やめてっ！」

ぴゅるっ、ぴゅるっと漏れ出てくる浣腸液。腹の中で攪拌された液体は意外なほどに汚れを含んでおらず、むしろ男たちの欲情を激しく煽る。

対して、尻の割れ目に滴って落ちていく液体は彼女の恥辱の証だった。

「ああっ……ふっ、うううぅ……！」

必死に力を入れるのに、漏れ出るのを止めることができない。ほんの少し乳房を弄ばれただけで、ほんの少し秘裂に舌を這わされただけで、防波堤である括約筋の力が抜けてしまう。むしろそこを意識することで、焦りは増して身体は敏感になる。

膣口を舌にほじられながら奈津樹は、胸に吸いつく男の頭をぎゅっと抱き締めた。赤ん坊が指にしがみつくように、無意識にすがりついてしまう。女の弱さを見せるような仕草など、したくはないのに。

「気持ちよさそうなのに、ずいぶん苦しそうだなあ？」

「く……ああっ、はぁ……はぅ！　おしりっ、だめ……ぇ」

チューブが突き立つ肛門を、マッサージのようにむにむに押し込んでくる数本の指。垂れ落ちてきた愛液を腸液混じりの浣腸液に馴染ませて、指はくるくる踊り回る。

（な、に……？　これ……ぇ）

悩乱する頭の中、尻をいじられて心地よさが生まれている。

指に押されてきゅっと力を込めた尻穴が、どうにもならずわずかに開く瞬間……身体がふわりと持ち上がり、脳裏に甘酸っぱい感覚が湧き出ている。緊迫感と解放感が生み出すギリギリの感覚は、直接的な快感にはない麻薬性を持っていた。

「は、ふあああっ！　んん、くううっ！」

なにかを求めるように男の頭をかきむしる捜査官の手に、ペニスがあてがわれる。指先で探るように亀頭の形を確かめ、肉茎を撫でて……しどけない動きが肉棒を包み込んだ。

しゅるしゅると男根を擦り上げる動作が、すぐにニチャニチャという水音を掻き撫で始める。それすら自虐的な感覚を生み、奈津樹は涙の浮いた目を宙にさまよわせた。

「さ、お待ちかねのペニスだぞ……」

そう言ったのは、ひときわ彼女を気に入っていた新藤だった。どうやら彼が一番槍を競り勝ったらしい。ペニスを勃起させて、奈津樹の上にのしかかってくる。

男たちが一時的に退いてスペースを空けると、新藤は自分の肉先で膣口をねちっこく撫で回した。小さな穴はいやらしく糸を引き、かすかに震えている。

「期待通り、なかなか締まりのよさそうなおま○こだな」

「……っ、ふぁ……？」

乳房や尻肉といった、性感的な部位以外に贅肉を感じさせない奈津樹の美身。それをじっくりと眺めて満足げに呟く。奈津樹は宙を見つめたままわずかに吐息を漏らしただけだ。
（あんなの……入れられて……犯される……）
息を切らせて呆然と目の前の男のものを見つめる。
拒絶もなくぐったりとした女体が腰を抱えられ、捜査官はわずかに呻いた。
押しつけられた亀頭が、つぷつぷと頭を埋めていく。
（う……んっ、はいって……きた……！）
亀頭に密着した膣口がみるみる広がっていく。肉棒の円周に食いつくような入り口は、ぷちぷちと愛液の雫を漏らしてへこまされていく。
じりじりした動きから次第にスピードアップ。下腹の圧迫感も強くなっていく。
ずるっ！
一気に埋め込まれた肉の硬い感触が、肉と肉にぴったり閉じられていた隘路を割り開く。
「ふぁああああああっ！」
がくんと身体を跳ねさせて、奈津樹の身体が痙攣したように揺れた。
「これ……ううっ、だめぇ……！」
ずずずっと潜り込んでくる肉に押されて、下腹の張り詰めが我慢できないレベルに達そうとしている。かといって精一杯の力をこめれば……。

「んぁっ！　ひぁ……あう……きつ……ううっ！」
「おお、締めつけてくる。もっと締めろ、もっとだ！」
きゅうっと締まる肉道が、愛液を含んでぬめる膣壁で圧迫してしまう。
男からすれば、熱くぬめついた肉にペニスを絞られて心地いいことこの上ない。だが奈津樹にしてみれば、それは全身から力を奪い去る魔悦でもあった。
太腿を持ち上げられて、お互いの腰が密着する。根元まで埋まった男根が、先端で行き止まりの壁を叩いた。
「当たって……ううっ、ふぁぁん！」
ごりっと突き上げてくる亀頭に、降りてきた子宮が押し戻される。身体を奥から叩かれる衝撃は脳天まで突き抜け、通り道に甘い痺れをまき散らした。
「ひっ、ああっ、う……く……んんっ！」
時折息を止め、唇を噛み締める。しかしそれは声を抑えるというより、湧き出る快感をもてあましているだけだ。
抱えられた腰は激しく突き込まれ、身体全体を揺らす。ガクガクと揺れる視界に脳を掻き回されながら、捜査官は必死に叫んだ。
「はぁ……っ、揺らさないで……もう、ううっ、ひっ！」
「中が蠢いて……ううっ！　吸いついてくる……！」

なのに男は聞く耳を持たず、腰を振り続ける。膣襞はペニスの出し入れにきゅっと吸いついて、彼女の意志とは真逆の反応を見せていた。悦楽は次から次に噴き出てくる。
「ほら、こっちも休むなよ！　いつまで経っても終わらねえぞ」
握ったペニスを扱くよう要求され、もはや条件反射的に手を動かす。
「ふはっ！　あぅ、ひゃぁ……んっ！」
もう、限界だ。こんな状態で正常な思考など保っていられない。
（わたし……か、感じ……てる……。犯されて感じて……る……うああっ！）
それを認めてしまうと、ぞくぞくとしたものが身体中に駆け巡った。心の枷がひとつ外され、突き上げられる子宮が艶声を響かせる。
（でも、お尻……気持ちいいけどっ……だめ……おしり、だけは……）
快楽と恐怖とがない交ぜになって、彼女を追い詰めていく。
ぶびゅるるっ！　どくっ、とぷとぷ……！
「はぁぁぁ……！」
膣内に射精があった。どろっと広がる液体が膣内に粘つき、子宮の入り口に絡みつく。
「はふっ、ふぁ……あ……うう……」
夢心地の眼差しが、満足して離れていく新藤を見つめていた。
（やっと……ひとり……？）

とはいえ、小さいながらも進歩は進歩だ。安心感とともに、どこか切なくも感じられる光景だった。

（でも、まだ疼いてる……お尻も、あそこ、も……ううっ、うずくぅ……っ）

下腹に感じる圧迫感は限界に近い。しかし、身体の疼きも無視などできない。

我知らず手の動きが活発になる。男を求めるように、さらなる快楽を求めるように……。

その隠された欲望に応えてか、新たな男がのしかかる。

「はっ、あ……はぁ……はぁ……はや、く……」

それを感じて、奈津樹の腰がうねった。

（なんて淫らなの……わたし、こんなに惨めで、いやらしい……）

もちろん、この浣腸責めからは逃れたい。だが、その大義名分はとっくの昔に薄まっている。なにしろヴァギナを抉られ、乳房を揉まれる快楽だけでなく、下腹をどんどん圧迫してくる浣腸液にさえ自分は快楽を感じてしまっているのだから。

本当に浣腸責めから逃れたくてこんなことをしているのか、自ら快楽を求めているのか、自分でも判断できない。降り注ぐ快楽は抗いがたい。

男たちが言った通りだった。敗北感に包まれて、奈津樹は初めて涙をこぼした。アルコールに冒されているから、あるいは捜査のためという言い訳など、もう役に立たない。

ぬぷぷぷっ！

「ひはうううっ、ああああんっ！」
新たなペニスの硬さを膣内に感じて、彼女はあられもない嬌声を上げた。
「いい……っ、うぁあっ！　抉って……ううっ！」
叫びながら、涎まみれの唇で手の中のペニスに吸いつく。
（はやくぅ……一本でも……おおくっ）
混乱したままペニスを求める。唾液に濡れた唇を擦りつけ、ぱくりと含む。生臭さを感じる亀頭に、ねっとりと舌を絡ませた。
「あんっ……！」
途端に精液を噴き出したペニスから、口の中にぼたぼた白濁が垂れ落ちてきた。舌の上に粘液がたまり、すぐに口の中は粘ついた液でいっぱいになる。むわっと広がる男の匂い。
「はぁう……んむ……ふ……」
休む間もなく次へ。下半身の突き上げも始まり、激しい呼吸が繰り返される。
「くはっ、んむううっ、ふっ、ううっ！」
とろんとした目を中空に向けて、彼女は涙の膜に包まれていた視界が一気に白さを増して瞬き始めたのに気づいた。
（あ、ああ……わたしっ、イク……？）
絶頂の予感は想像以上に彼女の心をかき乱した。

我慢できない。もっと、もっと……。普段の捜査官からは想像もできない貪欲な渇望が湧き出てくる。それに押しやられるように、浣腸への羞恥も薄れていく。

「ううっ！　む……」

ぎゅううっと膣口が締まる。男が呻く声が耳に飛び込んできて、淀んだ心をくすぐった。

自分でも信じられないほどの、未知の絶頂が近づいてくる。肛門がひくひくひくっと反応して、むず痒いような切迫感がさらなる悦楽の呼び水になった。

「ぷふぁっ！　もっとぉ！　突いて……つよく、うううっ！」

自分から腰を動かして、奈津樹はあられもなく絶叫した。ペニスがより深く届くように。甘い衝撃が身体中に響き渡るように。

「す、すげぇ……！　もっと締めてみせろ！　おら！」

それが男の欲望に火をつけ、動きを激しくさせる。

「ふぁ！　すごい……ううっ、とどく、奥に……ぃ！」

ぶぴゅっ、ぶぴゅっと飛び出すグリセリン溶液が、彼女の尻を伝って水たまりを作る。

「くる……ううっ、きちゃう……あああっ！　でもおおっ！」

ふるふると首を振る捜査官は、肛門の緩みに恐怖しながら、一方ではむしろその時を待ち望んでいる。自分で乳房を握り、揉みしだき、足は男の腰に絡みついていた。

垂れ流れる浣腸液がどんどん量を増す。上下の感覚が薄れ、身体がふわふわし始める。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
**株式会社キルタイムコミュニケーション**
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

**http://ktcom.jp/**